

## 大阪大学超域イノベーション博士課程プログラム 第4回 外部評価委員会の概要

大阪大学超域イノベーション博士課程プログラムでは、第三者の視点からプログラムの運営についての評価を行い、その意見をプログラムの改善に反映させることを目的として、外部評価委員会を設置いたしました。ここに掲載するのは、平成27年10月9日開催の第4回外部評価委員会における評価・意見の概要です。

外部評価委員会の場で得られた評価・意見を、グローバルに活躍できる人材育成を目指す本プログラムの発展と進化に役立てていきたいと思っております。

なお、外部評価委員は以下の通りです。

(文責：超域イノベーション博士課程プログラム 自己点検・外部連携ワーキング)

### 外部評価委員 〔五十音順、敬称略、役職名は、委員会開催当時のもの〕

上野山 雄	パナソニック株式会社 フェロー
岸本 喜久雄	東京工業大学 大学院理工学研究科工学系長 教授
齊藤 紀彦	株式会社きんでん 代表取締役会長
大坊 郁夫	東京未来大学 学長
中野 健二郎	京阪神ビルディング株式会社 代表取締役社長
広渡 清吾	専修大学 教授

## 講評の概要

項目	内容
プログラムの進捗状況、人材育成の効果	<p><b>【評価できる点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中間評価でA評価を得られたことは立派な結果である。留意事項として指摘された3項目への対応方針を良く練られ、さらに本プログラムの内容を発展・充実させて行こうとしている点を高く評価したい。</li> <li>・ 「超域イノベーション導入」→「超域イノベーション展開」→「超域イノベーション総合」→「超域イノベーション実践」という流れでの授業科目や活動などの開発・導入により、年次を追って段階的にプログラムの充実度が増している。履修生との懇談では、それらを通しての彼らの前回からの着実な成長をうかがうことができた。また、1期生自身が当初から今日までの本プログラム履修が有意義であったと感じている点は評価に値する。</li> <li>・ 毎年、履修生との懇談や一部授業の視察等を通して、1～3期生の意見を聞いていると、その変化に彼らの成長、つまり、多面的視点の文理混合された課程での視野の変化と将来リーダーになる要素を感じる。各企業でグローバルに業務分野のクロスが求められている今日、自分が事業領域の広い企業の採用の担当役員なら採用してみたいと思う人材に育てている。</li> <li>・ 特に印象付けられたのは、履修生の自覚の強さである。履修生は、本プログラムの目的に照応してオールラウンド型の人材として自らを育て上げることが、社会における役割とどのように結びつくかという点について、おそらく他の研究科の大学院生と大きく異なり、自己の専門知の活かし方をまさにオールラウンド的に考え、展望している。すなわち、本プログラムの履修生は、(既存の研究科における人材養成のような)専門知の側の既定の論理によって社会における役割を想定するのではなく、まさに、その専門知の社会的あり方をオールラウンド的に、つまり、超域的に探索しようとしている。専門力と汎用力の結合の一つのあり方がここに示されている。</li> <li>・ 履修生がこのプログラムの活動をする中で、課題 (agenda) 設定が重要であり、また、そのためには自分が目指すもの (価値) は何かという将来ビジョンをしっかりと描くことが不可欠であると感じており、加えて、その具体像を各人が明確に表現できている姿は頼もしい。</li> <li>・ 専門研究活動との両立という点でも、確かに時間の制約はきつくなったが、その分、専門研究管理のスキルが向上し特段の支障は生じていないと前向きな評価であった。</li> </ul>

<p>カリキュラム全体</p>	<p><b>【評価できる点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 試行錯誤しながらも、担当教員、関連の教員、事務が一体となり、カリキュラムの創意工夫に取り組んでおり、毎年バージョンアップしていると感じられる。</li> <li>・ プログラムの科目について年々改訂されており、新たに「超域イノベーション導入Ⅰ」を加えて、システムの観点についての工夫をされているところもとても良いことである。</li> <li>・ 「超域イノベーション実践」での研修の実施が、国内ではなく海外を希望する人が大半であったことは、近年、日本人留学生が著しく減少している状況においてたいへん挑戦意欲が高く、評価したい。また、研修内容においても汎用力が考慮されていた。これまでのプログラム構成が非常に良いものであり、プログラムのつくる側の意図と受ける側の意思が整合している点が評価できる。</li> <li>・ 履修生との面談においても、研修に対する高い意欲が感じられ、重要ポイントであるモチベーションが順調に育まれていると思われる。</li> <li>・ 海外プレ・インターンシップでは様々な異なる価値観や立場に触れる機会を得て、自らの将来ビジョン、課題設定を多様な視点から検討する動機につながっている点は、本プログラムの優れた特徴である。</li> </ul>
-----------------	--

カリキュラム全体	<p>【今後に向けての要望】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育目標としてイノベーション能力の育成を掲げ、教育プログラムに積極的にPBL授業を導入したことは良く理解できるが、一方で、博士課程教育リーディングプログラムの目標である「グローバルに活躍するリーダー」の育成との関連性についてはあまり明確にはされていない印象である。リーダー教育とイノベーター教育をどのように両立させるのかも含めてリーダー教育についての考えをまとめていただくことを期待したい。</li> <li>・PBL教育の進め方について、課題を与えて履修生に取り組みさせるということが行われているが、履修生にとっては課題解決策をどのような水準で提示すれば良いのかに対して戸惑いもあり、結果として、どのような能力が具体的に身に付いたかを履修生自身で実感することがあまり明確にできていないように思われる。プロジェクトの進め方についての“形”を教えることも検討してはどうか。</li> <li>・履修生からは、「自ら設定した課題に対する解決結果についての評価が自分では難しく、第三者からの評価が欲しい」との声があった。文理にまたがる幅広い教授陣や国内外活動先の産官学関係者から評価を受ける機会をさらに充実させることが望ましい。</li> <li>・履修生に自己評価を行わせているとのことであるが、例えば、1年毎に、どのような能力が身に付き、どのようなことができるようになったのか等を履修生に自己分析をさせることで、教育方法とその成果についての分析を行えるのではないかと思われる。</li> <li>・「超域イノベーション実践」での研修は非常に順調であるが、より本質を深堀する必要がある。社会課題の解決や社会貢献のプロジェクトを起こす場合、そこにはオーソドックスな基本的フレームがある。あるべき姿と現状との差から課題提起を行い、解決すべき手段を研究し実行することである。出口である社会貢献や顧客価値の具体的内容を決めなければ課題が生み出せないし、研究の目標も決められない。そこに時間をかけて議論しあう経験も大切ではないだろうか。</li> <li>・評価という視点からは、PDCAサイクルのCの段階が重要である。イノベーションからは多くのプラスの価値が生み出されるが、一方で思わぬマイナスの副作用をもたらすケースもゼロではない。プロジェクトの推進に当たっては、往々にしてその利点にのみ着目して成果を急ぎ、俯瞰的なチェックが疎かになりがちである。効果の確認とともに、マイナスのリスクへの十分な目配りについても、引き続きの指導を願いたい。</li> </ul>
----------	--

キャリア 形成支援	<p>【今後に向けての要望】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>履修生との面談で就職に関して不安を持っている傾向があった。研究科の指導教員の先生方ともう少し話し合われてはどうかと思う。</li> </ul>
将来にお けるプロ グラムの 継続と展 開	<p>【評価できる点】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>実施期間が残り2年となり、今後の継続性への検討が必要な時期になっているが、全学センターを設置することで本プログラムの理念を全学的に展開していこうとする計画には大きく期待できる。</li> </ul> <hr/> <p>【今後に向けての要望】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>これから創造的な人材を育成していくためには、この種の試みはとても貴重なこととなるので、担当者が替わっても、このプログラムのノウハウを後に伝えていくことは大事であろう。今後、予算規模などが変わっても、こういうやり方、プログラムがあるということを、後につなげていける手立てをつくっていただきたいと考える。</li> <li>同様のプログラムを実施している他大学とも連携して、継続のための施策をしておかなければ、立ち枯れになるのではないかと非常に心配している。また、心血注いでプログラムをリードしている教授陣と大阪大学、そして日本の大学のためにも、文科行政の貧困が学生、教授の不信を招くことのないような方策、文科省と大学が責任もった早めの対応が求められる。</li> </ul>
取り組 みの全学 的な展開	<p>【今後に向けての要望】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>このプログラムの趣旨、成果を全学的に波及していかなければ本来の意味がないと考える。このプログラムで出会った履修生同士はお互いに種々共有をしているように思われるものの、それをもっと履修生の所属研究室や研究科との交流へとさらに深めていければ、このプログラムの意味が全学的に共有されていき、広がっていくのではないかとと思われる。特に、大阪大学には他の4件のリーディングプログラムも存在しており、それとの関連性をあらためて考えなければならないと思われる。</li> <li>超域的な課題設定のなかで専門知を鍛え発展させるという課題は、ひるがえって考えれば、既存の専門研究科において、これからの専門知のダイナミズムの展望において、当然に取り組みされるべきものであろう。本プログラムの目的が提起している人材養成のあり方は、その意味で既存の大学院教育の全体について改革を迫るものともいえよう。本プログラムの意義は、このプログラムの成否に止まるものではなく、大阪大学の大学院教育システム全体に及ぶものと位置付けられなければならないと思われる。</li> </ul>

<p>プログラムの効果の検証</p>	<p><b>【今後に向けての要望】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・履修生達のプログラム終了後の進路や活動の様子を、ある一定期間、適切なインターバルと方法でフォローし、このプログラムが与えた影響を検証することも有意義ではないだろうか。その一助として大学側で、履修生達がプログラム終了後も折に触れて集まれる場が提供されるならば、履修生相互の啓発機会の間としても有効なものになると思われる。</li> </ul>
--------------------	--